

## 「みちのくだんわ室 記念誌 2」

### 一避難者の今・2年の想いを後世につなぐ(仮)発行予定

暮らしサポート隊は2012年6月に「みちのくだんわ室 1年の記録(2011.6~2012.5)」を発行いたしました。2周年を迎えて、2013年末に「みちのくだんわ室 記念誌2」を発行予定です。2年間を振り返り「今、何をなすべきか」を話し合いました。もちろん、避難者さんの歓談の場・みちのくだんわ室をつづけることが大切なことのひとつですが、「この悲惨な自然災害や苛酷な原発事故の被災によって、県外避難されている方々の想いを後世につなぐこと、語りつぐこと」は、災害備える意識を常にもち、原発のない安全な社会を実現するために、とても重要であると再確認いたしました。

みちのくだんわ室には、0歳~80歳半ばまでの幅広い年代層の方々に参加され、出身地も東北被災地から関東圏にまで広がっています。

避難者さんの状況や想いは一人ひとり違います。そこで、記念誌のテーマを、「避難者の今・2年の想いを後世につなぐ(仮)」とし、賛同者に「今だから語れる当時のこと」「2年が過ぎての今の想い」を、手記やインタビューをお願いして、20年後、30年後の子ども、孫、若い人たちのために記録することにしました。ご協力をお願いいたします。(石東)

暮らしサポート隊の活動にカンパをお願いします。

銀行名 ゆうちよ銀行

口座番号 14380-89019491

口座名義 クラシサポートタイ

## 編集後記

だんわ室も20回を越えて、開催場所のバリエーションにも限界を感じはじめていましたが、今回も神戸市立小磯記念美術館、風月堂さんにご協力、ご支援をいただき素敵な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。世間では少しずつ震災への意識が風化する中、神戸の地は、忘れず継続して支援していく必要性を身をもって知っています。これからも様々な方の支援のもとで、だんわ室を続けていけるといいなと感じています。

みちのくだんわ室 記念誌第2号の作成にむけて、参加者の方の「今」を聞かせていただいています。その中でも関西への広域避難に区切りをつけて、ふるさと東北へ戻られた方の様子をうかがいに宮城、福島へと出向いています。

今回、ご紹介したAさんの感想文を読ませていただき、福島の方だけでなく、広域避難されている方だけでなく、私たち全員が原発による被害を共に受け止め、共に生き抜く努力をしていかなくてはいけないと、改めて感じました。

(石塚裕子)

## 「暮らしサポート隊」

[http://www.geocities.jp/kurasapotai/0\\_home.html](http://www.geocities.jp/kurasapotai/0_home.html)

石東直子 (石東・都市環境研究室)

住所: 神戸市垂水区舞子台 7-1-4-305

電話: 078-781-1170

黒田裕子 (阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)

住所: 神戸市西区前開南町 1-2-1

電話: 078-976-5050

発行責任者: 暮らしサポート隊代表・石東直子

## 東日本大震災・暮らしサポート隊

# みちのくだんわ室たより vol.21

[http://www.geocities.jp/kurasapotai/0\\_home.html](http://www.geocities.jp/kurasapotai/0_home.html)

2013年9月8日 発行

### 娘たちの体内放射線を解毒することを願って

#### 保養キャンプに参加 —Aさんの感想文

Aさんは福島県から、0歳と2歳の女兒を連れて震災直後から神戸に母子避難されていました。「みちのくだんわ室」に2011年の当初からほぼ毎月参加され、今年の3月に長女の幼稚園の入園を機に、地元で仕事をされている夫君と家族そろっての生活をするために郡山市に帰られました。幼稚園の夏休み期間中は福島を離れ、体内被曝線を解毒(detoxify)するために、高知県での保養キャンプやその他の地で過ごされます。保養キャンプの帰路、神戸でお会いし、キャンプの感想文をいただきました。

たくさんの方に、Aさんの想いを伝えたいと思い、ご本人の承諾を得て、掲載いたします。

石東記

※※※※※※

自然豊かな高知県で過ごした一週間は、私たち親子にとっても宝物のような時間でした。子供を守りたいという、たくさんの方々のお心とご協力のもと、このキャンプが実現されたことに本当に感謝しています。

少しでも積算放射線を減らし、子どもたちを外で自由に好きなだけ遊ばせられるなら…と申し込んだこのキャンプ。これまで何度も保養先の落選が続いていて、この夏どう過ごそうと気持ちが沈みがちだったのですが、ダメもとで申し込んだこのキャンプから当選のお電話をいただいた時には、本当に嬉しくて涙がポロポロこぼれました。これで夏休みの一ヶ月間、放射

線の心配のない場所に子どもたち連れだせる！ これ以外の保養プログラムと帰省を絡めた予定表を手荷物に入れ、次女をおんぶし、片手にスーツケース、もう片方は長女の手をひいて、夏休み初日から郡山を離れました。

私たち親子にとって初めて保養プログラム。参加するには大きな期待と安心もありましたが、漠然とした不安もありました。でもキャンプに着いて、心の底からウェルカムモード全開なスタッフやボランティアの皆さんの笑顔や歓待ぶりに、私の不安はどこかに吹き飛び、すぐに緊張も解れて、久々にリラックスできました。

キャンプ地で聞こえるのは、子どもたちのはしゃぐ声。「蝉がいた！ クモがいた！ お花が咲いてる！ あっちも見てくる！」あちこち走り回るドタバタ足音。玄関横のビニールプールで裸んぼになって喜び子供達。ピアノ。川遊びに虫取り。外でピザ作りにバーベキュー。厨房からは美味しそうな料理の香りが風に乗ってきて、ごはんですよ〜の声。高知の新鮮な農産物を使って、婦人会の方々が作ってくださる夕食に毎晩舌鼓！

普段内部被曝を気にして生活している私たちに寄りそってくださっているお気持ちが嬉しかったです。

こんなにも子どもの喜びスケジュールを盛り沢山にご準備くださり、日に日にいい色に日焼けしていく娘たちを見て、このキャンプに参加してよかった。来て本当によかったと、心底思いました。

ここまで書くと、楽しかった夏の思い出の一ページ

のようですが、今手元にある積算線量計の表示は、故郷を離れて関西・四国で行動制限なしに自由に過ごした18日間で0.027mSv。夏休みが始まるまでの平日、車移動以外ほぼ屋内で過ごし、週末に比較的線量が低い地域で2時間ほど外遊びさせての郡山で生活しての18日間で0.051mSv。地域によって、日本国内でも2～3倍の放射線量の差はあると言われていますが、活動・行動範囲を制限しての積算線量と、制限なしの積算線量とは全く異質なものです。自然由来の放射能と原発事故由来の放射能とは性質だけでなく、成長期にある子ども達の体への影響も大きく違うのではないのでしょうか。小さな子供をもつ私からしてみると、不安や心配は尽きません。

生活の基盤がある郡山で、主人と一緒に娘たちを育てたい。どうしようもないジレンマはありますが家族揃っての暮らしはかけがえがなく、幸せのひとつです。自分の家で家族そろって寝食共にできる以上の喜びや豊かさはありません。震災後二年間母子避難で自宅を離れていたせいか、自宅での家族生活は精神的に大きな安心です。

子どもの内部被曝を避けるために家庭内ではできることは限られています。飲料水や料理にはペットボトル。野菜は関西から宅配取り寄せ。生鮮品はできるだけ限界値を下げて放射能測定されたもの。毎日の水まきや室内の拭き掃除、洗濯物は室内干し。週末は少しでも線量が低い場所へ遠出をして外遊びをさせます。いろいろ考えつく限りはやっていますが個人では背負いきれないのが現状です。限界があります。そこで、考え

定期的な保養キャンプや林間学校の開催を国が保証して、全国のすべての自治体が受け入れ体制を整えるようにすることが必要だと思います。子どもたちの内部放射線量を少しでも解毒し、健康な子どもを育てることは日本の未来のためです。「汚染されていないものを食べて、そこで数日間過ごすだけでも体内に蓄積された放射性物質を体外に排出して内部被ばくを軽減する効果がある。精神面でも効果は大きい」ということは、チェルノブイリ原発事故によるベラルーシの子どもたちを診察つづけた、日本のお医者さんたちが言っておられます。昨年夏休みと冬休みに、長野県松本市は飯館村の小中学生を招いて、松本市民と一緒にキャンプを開催されたという情報があります。松本市の市長は、お医者さんです。国の手立てを待たずにやろうと思えばできる自治体もあるでしょうが、継続するのは難しいです。

石東記

られるもっともいいと思われる方策が長期の保養だと思えます。

安心して野山を走り回れる自然環境で、新鮮な農産物を食べてしばらく過ごす、子どもの体内放射能はリセットされ、帰る頃には元気になることが、数々の保養プログラムで実証されています。難しい医学的根拠や科学的根拠はさておき、根拠は抜きにして、一母親として、それに賭けたい。健康を大切に、安心して大人になってほしい。行った先々の素敵な人たちや物の多様性に触れてほしい。マイナスをプラスにするくらいの強さと賢さを育ててほしい。

身勝手かもしれませんが、手を貸して下さい。こうしている間にも子ども達はどんどん大きくなります。低放射線を浴びながらも、その空気を吸いながらも、日に日にぐんぐん成長していきます。私たちと一緒に子どもたちを育てて下さい。私たちにできることは、何でも協力致します。どうかどうか、子どもたちの健やかな成長の為に、保養キャンプの継続にお力とお知恵をお借りできませんでしょうか。放射能汚染地帯で暮らす子どもたちを受け入れ、ともに成長をサポートして下さいと場所が、今後とも私達には必要です。

キャンプに関わって下さった全ての皆さん、本当にありがとうございました。大きな愛と豊かな自然に、元気と勇気ももらいました。新学期からまた郡山で、家族みんなで頑張ります。またお会いできる日を楽しみにしています。

2013年8月 A.

2013年6月だんわ室

海上文化都市 六甲アイランド 小磯記念美術館にて

### ゆったりと美術鑑賞&お茶会

6月23日のみちのくだんわ室は、神戸出身の画家、小磯良平氏の記念美術館へ出かけました。

小雨が残る中でしたが、参加者22人(大人18人、子ども4人)がJR住吉駅改札に集まり、六甲ライナーに乗って美津館へ向かいました。

小磯記念美術館は、海上文化都市として整備された六甲アイランドの入口に位置しています。到着すると、美術館の三好様がお出迎えくださり、美術館の概要、展示案内をしてくださいました。



### 特別展『堀江優遺作展』を鑑賞しました。

当日は神戸市出身の水彩画家堀江優遺作展が開催されていました。透明水彩画とは思えない迫力のある、独特のタッチで描かれた聖書人物画に感嘆の声が聞こえます。

美術鑑賞好きのお父さんは、「ここには何度か来ましたよ。静かでいい美術館です。」とにっこり。久しぶり参加の若い男性は、「友人から堀江優の展覧会に行くよう勧められていました。とてもよかったです。」と充実した表情をされていました。解散時間までずっと鑑賞されていたママさんは、「久しぶりに一人でゆっくりと美術鑑賞ができました。」とゆったりとした時間を過ごされたようでした。

### 館内の喫茶室でゆったりお茶会

館内にある喫茶室「風月堂 パッサージュ」でいつもの歓談の時間を設けました。

とても落ち着いた雰囲気のある喫茶室を貸切にいただき、美術鑑賞の感想や近況報告など、それぞれ

にお話が弾みます。

初めて参加されたご婦人に、ベテラン(?)参加者のお母さんが声をかけてくださり、話の華が咲きます。大阪から参加のNさんが、子を持つ母の手記をまとめた冊子の紹介と支援物資のおすそ分けの案内をしてくださいました。



### 子どもはのびのびと公園を駆け回りました

やはり元気な子どもたちには、美術館内だけでは時間を持て余すようで、学生スタッフとともに側にある公園で思いっきり駆け回っていました。

解散時間前には、汗をいっぱいかいて、喫茶室にいるお母さんに嬉しそうに報告していました。



最後はいつもの記念撮影をして解散しました。

